

考える葦

串田孫一



彌生書房

串田孫一（くしだ まごいち）

1915年東京に生まれる。1939年東京大学文学部哲学科卒業。東京高等学校、国学院大学、東京外国語大学等で教鞭をとり、1965年教壇を去る。著書、『串田孫一随想集』全6巻（立風書房）『博物誌』全5巻（社会思想社）『夢の中の風景』『流れる時』（以上、彌生書房）『ギリシア神話』『考えることについて』（以上、旺文社文庫）『光と翳の領域』『愛と幻想』（以上、講談社文庫）詩集『いろいろの天使』『音楽帖』（以上、彌生書房）等多数。

©1980

検印省略

考 え る 葦

昭和55年5月25日 初版発行

著 者 串 田 孫 一
発 行 者 津 曲 篤 子
印 刷 者 橋 本 伝 四 郎
発 行 所 株 式 会 社
彌 生 書 房

162 東京都新宿区中町18番地
電話・東京(260)3707(代表)
振 替 口 座・東京4—97315番

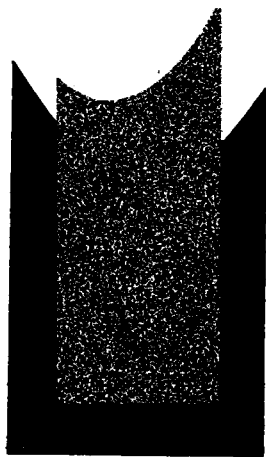
〈落丁・乱丁本はお取りかえいたします〉

新興印刷・大口製本
0012—80070—8525

考
え
る
葦

串
田
孫
一

彌
生
書
房



目 次

考える章

孤独なる幸福

敗北者の幸福

清らかな涙

花と星によせる想い

楽しい仲間

美しすぎる夢

感情の粧い

九

五

元

吾

五

六

八

五

うるわしい争い

二九

古風なひと

三六

地平線への郷愁

三三

秘められた愛情

四一

向うから来た恋

四六

メルヘンの世界

五五

芸術的な営み

六七

装幀 著 者

考 え る 葦

——美しい夢と思索のノート——

考える葦

悩める魂を宿していたバスカルが、ふと自分の姿を自分の臉の裏に想い浮べて、その映像をじっと見詰めていた時、それがだんだんに、川岸に弱々しく風に吹かれている一本の葦に変って来ました。空は灰色の雲にとざされ、水の面を渡る風が小波をつくっています。そこには、色彩を豊かにするような美しい小鳥の姿などは一羽も見られません。その風景は、何という荒涼としたものでしょう。

私たち自身も、その日その日にめぐり合わなければならぬさまざまな出来ごとの中に引き入れられて、これと同じような、あるいはもっと荒^すみ切った暗い風景を想うことがよくあ

ります。思い切った溜息さえ洩す元気もないそうした状態の中で、私たちは何にすることが出来るのでしょうか。

川岸に揺れている葦からもう一度人間の姿へ戻ろうとする時、私たちはこの考えるという営みを貴いものと思います。

考えるということは、一体何なのでしょう。私はその機能について詳しいことは知らないのですが、これは本当は、公平な働きをするものだと思うのです。というのは、人間はただ悦びのみを考え、苦しみに対しては振り向かずにいるわけには行かないからです。けれども、人間は、この機能がある程度までは自分で操ることも出来るので、必ずしも公平にそれを使っていないかも知れません。

出来ることなら、与えられた悦び、めぐり合った悦びをよく考えることによって、より大きなものにし、苦しみの方は小さくすることがいいとは思いますが、いつもそれを公平に使っていることが出来たら、もっと立派だと思えます。そこからは正確な判断が生れるでしょう。感情も、それをおして見る私たちの周囲にあるものも、それから一番肝心な自分自身も、思考にゆがみがありさえしなければ何の不安もなく整えられているでしょう。苦しみを

なるべく軽くしようと努めるのはそれからのことです。最初から悦びばかりを考えて苦しみを避けようとする、いつも自分を偽った生き方をしているではありません。思索は人の趣味ではないのです。そして特殊な人のみが思索をするのでもありません。

*

何かある一つの考えにとらわれてしまったようになる時、それを無理矢理に振り切って抜け出そうとするのは、いかにも卑怯なことのような気がしますが、考えることに疲れた時には何か方法をさがして、それを休め、新しい公平な思索のための用意が欲しいと思います。眠ることが、その日の疲れをやすめるように、というより、目覚めてからの力を準備するように、考える生活も何かによって正常な、若々しい力をいつも取り戻すようにしたいのです。私は今日昼すぎから、あることを考え始めて、それを帳面にかきつけたり、ぼんやりと目をつぶっていたりしていましたが、どうにも抜けられない溝のようなどころへ落ち込んでしまっているので、夜になってから久し振りに望遠鏡を近くの草原に持ち出して、ついさっきまで星を覗いていました。夜空にもそれと分る高積雲が、北の方の空にゆっくりと流れていました。

私は前から気になっていた、あのペルセウスに救われたアンドロメダの左の足先にあるガンマ星アルマクを見ていたのです。肉眼で見ただけでは大して変ったところもない二等星ですが、望遠鏡の視野にそれがさっと入って来たのをとらえてみると、それは、実にかわいらしい伴星がすぐそばにほつと付き添っている二重星です。

私はその星の光度や色をよく見覚えてから、露にぬれた草の小径をゆっくりと歩いて私の家の近くまで来ますと、窓に水色のカーテンが半分ほど引かれている部屋から、ショパンの『エチュード』作品二五の第九番がきこえていました。もうずいぶん夜は更けているのに、ピアノの音は、私が自分の部屋に戻ってこの文章を綴り出してからも、長い間きこえていました。時々耳にするこのピアノの音を、どんなひとがひいているか知らないのですが、広々とした花園を蝶が次々に花を求めて舞っている容子を、そのピアノの前に腰をかけている見知らぬひと、また私も、きっとそれぞれ別々に想い描いていたことでしょう。現に私は、二、三日前の日暮れに、私の家の花壇を飛び廻っていた二匹のヒメアカタテハのことを想い出していました。

*

私はこんなことをして、昼間のうち少しいじめつけてしまった思考に、きれいな星の光や、和やかな調べや、それに蝶の翅から鮮かな色などをそそぎ込んで、大分快い気分を造りあげることが出来ました。

私はひとに何と言われても、自分がこうした快い気分にはたっていられる時は、何ごともうまく出来ますし、自分の過去に積まれている苦悩も極く自然に整理されても行くので、これは尊い時だと思えます。こんな快い状態がいつまでも続けられるとは思いませんけれど、それを想えばこそ特に尊い感じを抱くのです。そうして、こういう時を、出来るだけ有効に使うことを考えます。私は、大体自分の力の限界を知っているつもりですが、こんな時にはひょっとして自分の力以上のことをもなし得ることがあり、次の仕事に、何かしら自信をもつて臨むことも出来るようになります。

それに私は、時々歯痒い表現をしたり、不要かも知れない感傷をまじえたりすることがあります。それはいけないことだと思つて下さっても構いませんが、ただ私としては、どうし

ても形を整えることの出来ない考えや、いつまでも輪郭がはっきりと見えて来ない考えを、既に整えられたものとして書くことは出来ません。

考えることだけは、まだ形を持っていないもので、誰もそれをすなおにやっていますが、それを自分に理解させようとする時にゆがめてしまうことが案外多く、それをさらにゆがめて表現することを想うと、私は考えていることをなかなかきばきと書き現わすことが出来ません。そんな時には、息詰るような想いの中で、考えるということが、快不快の感じなどを越えた、人間の大きな仕事だということをしみじみと知るのです。

孤独なる幸福

私はもう何年か前に、ごく短い幸福論のようなものを書いて、大袈裟な題を附けるのもいやだし、といってあまりひねくれた題もやはりいけないと思って、そのまま編輯のお嬢さんに渡すと、それに誰が考えてくれたのか、「孤独なる幸福」というこんないい題がついたのです。もしも自分が考えた題だったらば、やはり何ということはないけれど孤独者を気取るのが気恥かしいことだから、そうは得意にもなれなかつたろうと思いますが、自分がつけたものでないとなるとかえって気軽にそれが口に出せるばかりではなく、段々と私の幸福論が、社会だの自分以外の人たちとの交渉を一応断ったところに成立するもののように思われて来